

旧・附属診療放射線技師学校

奥村 建一郎

放射線技師の教育は、「診療エックス線技師法」施行1951年6月11日（昭和26年）の後，各地に国公私立の診療エックス線技師学校が設立され，放射線医学分野の進歩に合わせた高度な技術と教養を得た技術者の育成が開始された。

千葉大学においては，国立大学医学部附属学校として全国で7番目に「千葉大学医学部附属診療エックス線技師学校」として1957年4月1日（昭和32年）に設立された。この学校は2年制で1学年20名の定員であり，同年5月30日には開学式典が挙行され，放射線技師教育の第一歩を記すこととなった。しかし，開校当時は教育環境や設備に必ずしも恵まれていたとは言えず，木造の旧医学部舎の一角に在った放射線医学教室の医局を利用し，同年9月に整形外科研究室に講義室・実験室・教官室・事務室を設けた。4年後の1961年3月（昭和36年）には独立校舎として，木造の旧医学部法医学教室に校舎を移転し，そこに15年7ヵ月の間，多くの学生が勉学に励んだ。その後も附属病院（現千葉大学病院）の新築に伴い校舎も数回移転した。

開校8年目の1965年代に入り，放射性同位元素の開発により高エネルギーガンマ線を利用した放射線治療および核医学検査が急速に発展し，1966年4月（昭和41年），この2年制の診療エックス線技師学校に1年制の専攻科が増設され，より高度な知識を持つ技術者の育成がなされた。さらに1968年6月（昭和43年），診療放射線技師法の制定により，翌年4月より3年制の「千葉大学医学部附属診療放射線技師学校」として校名が変更された。これにより，資格名称も診療エックス線技師から診療放射線技師と替わり，本校の学生数も1学年20名で3学年の総数60名となった。また，1976年1月（昭和51年），学校教育法の改正により専修学校となり，1978年1月（昭和53年），新附属病院（現大学病院）の落成により，医学部が旧附属病院に移転して亥鼻西地区合同校舎が整備されたのに伴い本校も移転した。

本校の初代校長に北村武教授（耳鼻科），二代目

校長として笈弘毅教授（放射線科）が就任された。笈弘毅学校長は本校のため18年間，教育ならびに発展に尽力され，1975年3月（昭和50年）に退官された。同年4月，当時千葉大学学長，香月秀雄先生が学校長事務取扱として就任され，同年7月に有水昇教授（放射線科）が第三代目学校長として就任された。有水学校長は19年間，放射線技師教育に尽力され，1994年3月（平成6年）に退官された。その後は，磯野可一学校長事務取扱（病院長：第二外科教授），および，新美仁男学校長事務取扱（病院長：小児科教授）が学校長を代理し，1996年（平成8年）から第四代目学校長として伊東久夫教授（放射線科）が就任された。

専任教官として，田中仁講師，秋庭弘道講師，酒井尚信講師，高崎克彦講師，山本哲夫講師，齋藤正好講師，鎌形望講師，下瀬川正幸講師が長きにわたり技師教育に務められた。

本校を除く全ての国立大学の施設は，医療技術短期大学部や4年制の保健学科に移行している中，千葉大学の「診療放射線技師学校」の4年制学科の移行が卒業生や県内外の関係者から強く要望された。しかし，文部科学省の大学医学部におけるコメディカルの専修養成を廃止するという考えから，千葉大学医学部附属の看護学校，助産婦学校と共に平成14年3月に廃校となった。文部科学省で最後の専修学校である「千葉大学医学部附属診療放射線技師学校」は，前身の「附属診療エックス線技師学校」開校から763名の卒業生を送り出し，45年の放射線技師教育の歴史に幕を閉じることとなった。

最後に本校の卒業生は，全国各地の医療機関をはじめ，研究，教育機関のリーダーとして活躍している。これも学校長はじめ，非常勤講師として教鞭を執って頂いた千葉大学医学部や工学部の諸先生および関係者のご尽力の賜物であり，本校の同窓会として改めて感謝したい。

（おくむら けんいちろう）